# 日本語学習者による「Nのコト」の理解について

東　　桜 子

# Japanese Language Learner's Understanding of the 'N (Noun) no koto'

HIGASHI Sakurako

**Abstract**

The Japanese grammar form 'N (Noun) no koto' is capable of being classified into an essential 'no koto' and an optional 'no koto' form, which makes it difficult for Japanese-language learners to correctly use it. In this study, 86 Japanese-language learners were surveyed about the use, the misuse, and understanding of the 'N no koto' function. The higher level of Japanese learners, the easier it was to understand the essential 'no koto' form; however, the optional 'no koto' was difficult regardless of language level. The optional 'no koto' which appears in copula sentence was especially difficult for learners as whether it is present or not the sentence is complete resulting in a large number discounting it. In addition, Korean speakers had difficulty with the use of 'no koto' and 'koto' as they used the former as the latter to refer to an attribute. However, For Chinese speakers, their understanding of optional 'N' as being a specific element was lower.

**キーワード：**「Nのコト」、日本語学習者、コピュラ

## 1．はじめに

日本語における「名詞」＋「のコト」（以下、「Nのコト」）は、必須の「のコト」と随意的な「のコト」に分けられる。それは、次のような文に現れる。

(1)　a.* 太郎は花子を話している
　　b.　太郎は花子のコトを話している

(2)　a. 太郎は花子を愛している
　　b. 太郎は花子のコトを愛している

（笹栗（1998）p .162）

笹栗（1998:162）によると、(1b）では「のコト」は「について」で置き換えることが可能で、これは「のコト」の基本的な機能とも言えると述べており、(1b）の「のコト」は必須である。一方（2b）は「のコト」があってもなくても良い随意的な「のコト」である。また、笹栗（1998：161）は（2ｂ）のような「のコト」が現れる文は受動化も名詞化もされず、目的語の位置にしか現れないという統語分布の制限と、Nは定性名詞に限られるという意味的制限を受けると述べている。

「Nのコト」という表現は、日本語学習者が正しく使用するのに難しい点がある。「Nのコト」は日

本語能力試験N3レベルの文法である[1]が、時に日本語能力試験N1レベルのような日本語レベルの高い学習者にも誤用が見られる。そこで本稿ではこれまでの研究をもとに、日本語学習者が「Nのコト」をどこまで理解しているのか、またどのような誤用が多いのかという点に関する一説を論じるため、日本語学習者86名にアンケート調査を行った。その結果をもとに、日本語のレベル別による比較、日本語学習者の母語別による比較、中でも主に韓国語母語話者と中国語母語話者を中心に分析する。[2]

## ２．先行研究

坪根（2002）は、韓国語話者を対象に、形式名詞「もの」「こと」の自然発話における使用と習得について考察しその習得順序を提案しており、「Nのこと」についてはその中の一部として記されている。坪根（2002：29）は、「Nのこと」のように「～のこと」を後続させて、名詞で表される個体を「こと」化する、つまり、存在物Nに「こと」を付けることでNに関する事柄を表すようにするという概念や、事柄を直接的に述べるのではなく、「ということ」を後続させることで先行する事象を一般化したりすることは、「たことがある」「ことができる」等のように定形表現である特定の意味を示すものと比べて、習得されにくいものだと思われると述べている。「Nのこと」の結果のみ抽出すると、韓国語話者30名のうち初級５名と中級10名の発話の中で「Nのこと」を使用した学習者はおらず、上級の10名中３名、超級の５名中５名全員が発話中正しく使用している。[3]その結果をもとに、「Nのこと」は上級で習得が始まり、超級になるとその習得段階が高くなるとしている。

さらに、坪根（2005）では、上記の研究の続きとして中国語話者を対象に「もの」「こと」の自然発話における使用について調査・分析し、正用順序について提案をしている[4]。同じように「Nのこと」のみ抽出すると、中国語話者30名のうち「Nのこと（こと化）」を初級５名中１名、中級10名中２名、上級10名中８名、超級５名中４名、さらに「Nのこと（時）」を初級５名中０名、中級10名中１名、上級10名中２名、超級５名中１名の学習者が発話中正しく使用している。[5]坪根（2002）の韓国語話者と比較すると、「Nのこと（こと化）」は韓国語話者の初級中級では見られなかったが、中国語話者では初級中級共に現れており、上級で正しく使用した韓国語話者は３名、中国語話者は８名で中国語話者が多い。さらに韓国語話者の発話では出現しなかった「Nのこと（時）」を使用する中国語話者が現れている。これらの結果をもとに本研究の結果を予測すると、中国語話者の方が「Nのこと」を理解している学習者が多いと考えられる。また、坪根（2005）では代表的な誤用例も示してある。

例a：わたしは*地震のことはじめての、経験です。
例b：結婚もしましたし、それで、あの*キャリアウーマンのこと、あの日本であまりできないと思う、〔中略〕それぞれでどういうふうに、あの、バランスとりますか。

例aは、「のこと」を付けて「こと化」する必要のないところにも付けてしまっているものである。例bは、「キャリアウーマンのようなこと」かあるいは「キャリアウーマンのような生活」としたほうがいいものであり、「Nのこと」の使用範囲を広げて使用していると思われる。

（坪根（2005）pp.16-17）

いずれも自然発話における「もの」「こと」の使用を分析し、その習得順序や正用順序を提案してい

るものであり、「Ｎのこと」はそれの一部にすぎないため、「Ｎのこと」に関する詳しい分析まではされていない。また、どのような文脈で「Ｎのこと」が使われたのか使用された全ての文が提示されていないため、使用された「Ｎのコト」が必須のものであるか、随意的なものであるかなどが分かる詳しい情報は記されていない。さらに、「Ｎのこと」をどのくらい理解しているのかという点では、理解しているが発話では「Ｎのこと」を使用する機会がなかった場合や、発話では正しく使用しているが「Ｎのこと」の全てを理解しているわけではない場合がある。その点で坪根（2002)、坪根（2005）との比較も行いながら考察した。その結果、坪根（2002）では初中級の韓国語話者の発話中には「のこと」が出現しなかったが、中級にも必須の「のコト」を理解している学習者がいることが分かった。反対に坪根（2002）の超級の韓国語話者は5名中全員が正しく使用していたが、超級でも完璧に使いこなせるわけではなく誤用が見られる結果となった。さらに坪根（2002)、坪根（2005）をもとに中国語話者の方が「Ｎのこと」を理解している学習者が多いと予測していたが、中国語話者は特にコピュラ文に現れる「のこと」が韓国語話者より理解できていないことが分かった。

## ３．調査方法と対象

### 3. 1.　アンケート作成

本研究では笹栗（1996）をもとに必須の「のコト」、随意的な「のコト」に分け、また随意的な「のコト」は金（2012)、笹栗（1998)、山口（1973）をもとに「Ｎは特定の要素」、「コピュラ文における３タイプ」、「コト：属性」という３つに注目してアンケートを作成した。

アンケートの問題は必須の「のコト」に関する問題を６問（問題１)、随意的な「のコト」に関する問題を９問（問題２、３)、計15問である。いずれも選択問題であり、各学習者の「Ｎのコト」への理解度を可能な限り正確に分析するため、分からない場合は答えを予想せず「分からない」を選ぶようアンケート前に学習者に向けて指示してある。なお、問題文の漢字にはすべてルビを付け、問題文の中で「Ｎのコト」以外での語彙や表現が分からない学習者がいた場合は、口頭で意味の補足を行ったため、「分からない」という答えは「Ｎのコト」に関しての「分からない」という回答とする。

### 3. 2.　対象

対象はＡ大学に所属する日本語学習者である留学生86名である。学習者はそれぞれさまざまなレベルの日本語のクラスに属しているが、本稿では各クラスの授業内容のレベルをもとに表１の「日本語レベル」のように初級前半から特級までに１から８の番号を振り、学習者の日本語レベルを数字化した。この日本語レベルの数字は、４章で母語別に回答結果の比較をする上で各母語の日本語レベルの平均を参考にする際にも使用する。また、本調査のアンケートは初級前半レベルの学習者は内容が難しく回答が困難であるため対象から除外し、初級後半から特級の学習者を対象とした。学習者の母語別の人数と、日本語レベル別の人数は表１の通りである。

**表１　対象者の日本語レベルと母語別による人数**

| 日本語レベル | | 学習者の母語 | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 韓国語 | 中国語 | 英語 | ネパール語 | フランス語 | ベトナム語 | |
| 1 | 初級前半 | – | – | – | – | – | – | – |
| 2 | 初級後半 | 2名 | 2名 | 3名 | 0名 | 3名 | 0名 | 10名 |
| 3 | 初級と中級の間 | 1名 | 2名 | 5名 | 11名 | 5名 | 0名 | 24名 |
| 4 | 中級前半 | 2名 | 6名 | 2名 | 0名 | 0名 | 0名 | 10名 |
| 5 | 中級後半 | 5名 | 5名 | 0名 | 0名 | 1名 | 0名 | 11名 |
| 6 | 上級前半 | 6名 | 5名 | 0名 | 0名 | 0名 | 0名 | 11名 |
| 7 | 上級後半 | 3名 | 6名 | 0名 | 0名 | 0名 | 1名 | 10名 |
| 8 | 特級 | 1名 | 9名 | 0名 | 0名 | 0名 | 0名 | 10名 |
| 計 | | 20名 | 35名 | 10名 | 11名 | 9名 | 1名 | 86名 |

## ４．結果と考察

### 4. 1.　必須の「のコト」

4.1節では必須の「のコト」を分析する。笹栗（1996：38）では、必須の「Nのコト」において「コト」は認識思考動詞に意味的に選択されるとしている。まずは必須の「のコト」の後ろにいくつかの動詞を置き、下記の問題１のように計６問を作成した。「のコト」が必要な動詞として「発表する・聞く・考える・分かる」の４つを使用し、「Nのコト」が使えない動詞として「撮る・走る」を使用している。

問題１　文を読み、のこと が正しい場合は（○）、正しくない場合は（×）、分からない場合は（？）を書いてください。

Q1. 日本語の授業で自分の国のことを発表する。（　　）
Q2. 授業の後、先生にテストのことを聞こうと思っている。（　　）
Q3. 旅行でたくさん写真のことを撮った。（　　）
Q4. 最近、よく将来のことを考える。（　　）
Q5. これは日本のことがよく分かる本だ。（　　）
Q6. 田中さんは健康のために、毎日家の近くのことを走っているらしい。（　　）

結果は次のようになった。

**表2-1　必須の「のコト」日本語レベル別解答分布表　（問題１）**

| 日本語レベル | | 全体平均 | 2. 初級後半 | 3. 初級と中級の間 | 4. 中級前半 | 5. 中級後半 | 6. 上級前半 | 7. 上級後半 | 8. 特級 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 名 | 10 名 | 24 名 | 10 名 | 11 名 | 11 名 | 10 名 | 10 名 |
| Q1. | ○ | 74% | 50% | 67% | 70% | 82% | 73% | 100% | 90% |
| | × | 22% | 40% | 29% | 30% | 18% | 27% | 0% | 0% |
| | ? | 3% | 10% | 4% | 0% | 0% | 0% | 0% | 10% |
| Q2. | ○ | 67% | 40% | 50% | 60% | 64% | 82% | 100% | 100% |
| | × | 23% | 20% | 38% | 40% | 36% | 9% | 0% | 0% |
| | ? | 9% | 40% | 13% | 0% | 0% | 9% | 0% | 0% |
| Q3. | ○ | 20% | 70% | 33% | 20% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| | × | 76% | 10% | 63% | 80% | 100% | 100% | 90% | 100% |
| | ? | 5% | 20% | 4% | 0% | 0% | 0% | 10% | 0% |
| Q4. | ○ | 81% | 30% | 75% | 100% | 100% | 82% | 100% | 90% |
| | × | 12% | 30% | 17% | 0% | 0% | 18% | 0% | 10% |
| | ? | 7% | 40% | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q5. | ○ | 62% | 40% | 46% | 60% | 73% | 73% | 80% | 80% |
| | × | 28% | 30% | 33% | 40% | 27% | 27% | 20% | 10% |
| | ? | 10% | 30% | 21% | 0% | 0% | 0% | 0% | 10% |
| Q6. | ○ | 16% | 20% | 29% | 40% | 9% | 0% | 0% | 0% |
| | × | 71% | 10% | 63% | 60% | 91% | 91% | 100% | 90% |
| | ? | 13% | 70% | 8% | 0% | 0% | 9% | 0% | 10% |
| 平均正答率 | | 72% | 30% | 61% | 72% | 85% | 84% | 95% | 92% |

　　は正答率

まず、表2-1をもとに正答率から見ていくと、問題１の全６問中86名の全体正答率が最も高かったのがQ4の「最近、よく将来のことを考える。」である。表2-1を見ると、中級前半の学習者から正答率100％が現れている。初級と中級の間の学習者も75％が正答しているため、「考える」と「Ｎのコト」の関係は初級が修了した程度の学習者にも理解がしやすいものであることが分かる。

平均正答率は、初級後半から初級と中級の間で２倍に上っており、初級後半では「Ｎのコト」が未習で、初級と中級の間は既習であること[6]が理由の一つであると考えられる。また、初級と中級の間からレベルが上がるにつれ正答率も少しずつ上がっていくため、必須の「のコト」は「Ｎのコト」を学習後、レベルが上がるにつれ理解度が高くなることが分かる。

次に、「のコト」が使えない動詞を使用したQ3、Q6を見ていく。これらの問題は必須の「のコト」が「について」で置き換えが可能であるという機能が分かっていると、「のコト」が使えないと判断できるものと考えられる。全体平均の正答率はどちらも70％以上である。Q3、Q6のみで日本語レベル別に正答率の平均を出すと、初級後半10％、初級と中級の間63％、中級前半70％、中級後半以上はいずれも95％となった。「のコト」が使えない動詞の場合、初級と中級の間から正答率が上がり、中級後半以降の95％の学習者は「のコト」が使えないという判断ができ、理解度が高いことが分かった。

**表2-2　必須の「のコト」母語別解答分布表　（問題１）**

| 母語 | | 全体平均 | 韓国語 | 中国語 | 英語 | ネパール語 | フランス語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 人 | 20 名 | 35 名 | 10 名 | 11 名 | 9 名 |
| 各母語の日本語平均レベル | | 4.7 | 5.3 | 5.8 | 2.9 | 3 | 2.9 |
| Q1. | ○ | 74% | 80% | 74% | 50% | 82% | 78% |
| | × | 22% | 20% | 23% | 40% | 18% | 11% |
| | ? | 3% | 0% | 3% | 10% | 0% | 11% |
| Q2. | ○ | 67% | 75% | 80% | 20% | 64% | 56% |
| | × | 23% | 15% | 20% | 30% | 36% | 33% |
| | ? | 9% | 10% | 0% | 50% | 0% | 11% |
| Q3. | ○ | 20% | 5% | 9% | 50% | 45% | 33% |
| | × | 76% | 90% | 89% | 40% | 55% | 56% |
| | ? | 5% | 5% | 3% | 10% | 0% | 11% |
| Q4. | ○ | 81% | 85% | 94% | 40% | 91% | 56% |
| | × | 12% | 15% | 3% | 20% | 9% | 33% |
| | ? | 7% | 0% | 3% | 40% | 0% | 11% |
| Q5. | ○ | 62% | 60% | 83% | 10% | 36% | 67% |
| | × | 28% | 35% | 11% | 40% | 64% | 22% |
| | ? | 10% | 5% | 6% | 50% | 0% | 11% |
| Q6. | ○ | 16% | 5% | 17% | 20% | 27% | 22% |
| | × | 71% | 90% | 74% | 40% | 73% | 44% |
| | ? | 13% | 5% | 9% | 40% | 0% | 33% |
| 平均正答率 | | 72% | 80% | 82% | 33% | 67% | 60% |

　　は正答率

次に、必須の「のコト」を母語別に分析する。表2-2は５つの母語に分けたものである。[7]なお、各母語によって日本語のレベルが違うため、「各母語の日本語平均レベル」の数値を表示している。平均レベルの目安と各母語のレベル別による人数は表1を参考にしていただきたい。[8]

韓国語母語話者（日本語平均レベル5.3）と中国語母語話者（日本語平均レベル5.8）を見ると、Q5以外は全て70％以上の正答率となり、Q5は中国語母語話者の正答率が83％に対し、韓国語母語話者は60％である。この差は母語の転移によるものだと考えられる。Q5の「日本のことがよく分かる本」は、中国語では日本語と同様「日本のことがよく分かる本」となるが、一方韓国語では「日本がよく分かる本[9]」となる。Q5で×と答えた韓国語母語話者が35％いることから、韓国語では「のコト」を使用しないことにより「のコト」がなくても良いと考えている学習者が35％いることが分かる。また、これはQ1で×と答えた20％も同じ理由が考えられる[10]。Q1とQ5で×を選択した韓国語母語話者は初級後半から特級まで日本語レベルはそれぞれであった。坪根（2002）で超級の韓国母語話者は５名中５名全員が発話中「Nのコト」を正しく使用していたが、特級の唯一の韓国語母語話者は母語の転移が

予測されるQ1とQ5中、Q5を×と答えており、発話中には見られなかった母語の転移により必須の「のコト」を省略するという誤用が特級にも現れている。

また、「のコト」が使えないQ3とQ6で、韓国語母語話者はいずれも90％の正答率となった。残りの10％は全て初級後半の学習者であり、初級と中級の間以上は正答率100％となるため、「のコト」が使えない動詞の場合、初級と中級の間以上の韓国語母語話者は「のコト」が使えないという判断をすることができると言える。一方、中国語母語話者はQ3とQ6で誤答した学習者の日本語レベルにはばらつきがあり、上級や特級で誤答する学習者も現れた。韓国語母語話者は初級と中級の間以上の100％が正答している反面、中国語母語話者は日本語レベルに問わず理解できていない学習者が一部いることも同時に分かる。

さらに、坪根（2002）では韓国語母語話者による初中級の発話中「のコト」が出現しなかったが、問題１では中級前半に１名、中級後半に３名の学習者が６問全てを正答した。この結果によって、中級にも必須の「のコト」を理解し、「Ｎのコト」が必要な動詞と使えない動詞の区別もできる学習者がいることが分かる。つまり、中級の韓国語母語話者の場合、理解はできているが発話として実用することまではできない学習者がいると考えられる。また、同じく中国語母語者も問題1の6問全てを正答した学習者は中級前半から出現した。[11]

### 4. 2.　随意的な「のコト」

次に、随意的な「のコト」について分析する。まず、随意的な「のコト」のＮには次のような制限がある。

#### 4. 2. 1　Ｎは特定の要素

⑶ 「Ｎのこと」のＮは特定の要素でなければならない

（笹栗（1998）P.166）

この制限を学習者がどこまで理解しているのか、アンケート問題2のQ1、Q3を通して分析する。笹栗（1998）ではこの制限からなる例文がいくつか挙げられているが、本調査では下記のものをもとにアンケートの問題を作成した。

⑷　どんな人が好きですか

a.　背の高い人が好きです

b.*背の高い人のコトが好きです

⑷はどんな属性をもつ人が好きなのか、という問である。従って答えは「のコト」のない（4a）の方が適格である。（4b）は「のコト」がついており、特定の人を指す意味になるため、この問の答えとしては適当でない。

（笹栗（1998）pp..166-167）

これをもとに作成したのが問題２のQ1である。

問題２　Q1　山田：花子さんは、どんな人が好きなの？

花子：背が高くて、優しい人【　a.　が　／　b. のことが　】好き。

これに加え、山口（1973:45）では⑶の制約を破っている例が挙げられている。

⑸　a 君ハ誰ガ好キデスカ

b 君ハ誰ノコトガ好キデスカ

⑸の「誰」は一見〔特定的〕ではないと思われるかもしれないが、この文の発話者は「誰」のところに〔特定的〕な人物がいれられることを期待しているのであるから、この「誰」は〔特定的〕とみなすことができるのである。ただし、つぎの例は明らかに〔非特定的〕である。

⑹　a 君ハ誰カ（ガ）好キデスカ

b* 君ハ誰カノコトガ好キデスカ

（6a）の発話者は好きな人物の存在を訪ねているのであって、特定の人物の名前を挙げることを期待しているわけではないのである。したがって、予期した通り、「ノコト」を付加した（6b）は非文法的である。

（山口（1973）p.45）

この例をもとに作成したのが問題２のQ3である。

問題２　Q3　田中：さっきから、ずっとその写真を見ているね。

その写真の中の誰か【a.　が　／　b. のことが　】好きなの？

なお、問題2以降は上記のQ1、Q3のように会話文の中に【　a.　が　／　b. のことが　】を提示し、状況や会話文を読み、下記の１～４から答えを選ぶという形式を用いた。表3および表4の1から４の数字は下記の選択肢を指している。問題２のQ1とQ2の結果は次のようになった。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1　　a. | 2　　b. | 3 a.b. どちらも○ | 4　わからない |

**表3-1　随意的な「のコト」－Nは特定の要素－　日本語レベル別解答分布表　（問題２）**

| 日本語レベル | | 全体平均 | 2. 初級後半 | 3. 初級と中級の間 | 4. 中級前半 | 5. 中級後半 | 6. 上級前半 | 7. 上級後半 | 8. 特級 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 名 | 10 名 | 24 名 | 10 名 | 11 名 | 11 名 | 10 名 | 10 名 |
| Q1. | 1 | 63% | 60% | 71% | 60% | 27% | 73% | 80% | 60% |
| | 2 | 13% | 20% | 4% | 20% | 0% | 9% | 20% | 30% |
| | 3 | 24% | 20% | 25% | 20% | 73% | 18% | 0% | 10% |
| | 4 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q3. | 1 | 44% | 30% | 33% | 70% | 45% | 36% | 40% | 70% |
| | 2 | 27% | 50% | 46% | 10% | 9% | 18% | 30% | 0% |
| | 3 | 26% | 10% | 13% | 20% | 45% | 45% | 30% | 30% |
| | 4 | 3% | 10% | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| 平均正答率 | | 54% | 45% | 52% | 65% | 36% | 55% | 60% | 65% |

　　は正答率

表3-1をもとに日本語レベル別に分析する。まず、Q1の全体平均正答率は63％で、全体的に見ると中級後半の27％以外は正答率の違いはあまり見られない。Q1で「のコト」が必要だと考えているということになる２と３を選択した学習者の数値を合わせた場合、全体平均は37％になる一方、中級後半は73％となり、この数値は他レベルと比べ非常に高い数値である。ここで特徴的だったのは、中級後半の10名中5名が中国語母語話者であるがその５名中５名全員がQ1で３と答えている点である。これについては表3-2の母語別による比較で詳しく述べることとする。

また、表3-1では表2-1の必須の「のコト」のように、日本語レベルが上がるごとに正答率が上がるわけではないことが分かり、上級や特級の日本語レベルの学習者にとっても⑶の制限による「のコト」の有無の区別は難しいものであることが分かる。

**表3-2　随意的な「のコト」－Nは特定の要素－　母語別解答分布表　（問題２）**

| 母語 | | 全体平均 | 韓国語 | 中国語 | 英語 | ネパール語 | フランス語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 人 | 20 名 | 35 名 | 10 名 | 11 名 | 9 名 |
| 各母語の日本語平均レベル | | 4.7 | 5.3 | 5.8 | 2.9 | 3 | 2.9 |
| Q1. | 1 | 63% | 80% | 46% | 90% | 82% | 33% |
| | 2 | 13% | 0% | 26% | 10% | 0% | 11% |
| | 3 | 24% | 20% | 29% | 0% | 18% | 56% |
| | 4 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q3. | 1 | 44% | 50% | 51% | 30% | 45% | 22% |
| | 2 | 27% | 15% | 20% | 20% | 55% | 44% |
| | 3 | 26% | 35% | 29% | 20% | 0% | 33% |
| | 4 | 3% | 0% | 0% | 30% | 0% | 0% |
| 平均正答率 | | 54% | 65% | 49% | 60% | 64% | 28% |

　　は正答率

次に表3-2をもとに母語別に分析する。まず、Q3は上記で紹介した山口（1973：45）のように、日本語では「誰のことが好きですか」は言えるが、「誰かのことが好きですか」は「のコト」があるため非文法的となる。しかし、韓国語では「誰」と「誰か」の区別が日本語のようにはっきりしておらず、Q3のような場面で韓国語では「誰かが好きなの？」と「誰が好きなの？」のどちらも使うことができる。この違いにより、韓国語母語話者にとってQ1よりQ3が難しいのではないかと予想していたが、予想通り80％から50％へと正答率が下がる結果となった。よって、韓国語母語話者は「誰」と「誰か」という点で随意的な「のコト」へも母語の転移が生じることが分かり、これは上級や特級にも表れた。この誤用も坪根（2002）の超級の発話では出現されなかったものであり、日本語レベルを問わず母語の影響は大きいものであることが分かる。

次に、Q1では韓国語母語話者の正答率は80％で、中国語母語話者は46％と大きく下回っている。Q1の場面で「のコト」を使うことができると考えている学習者は、２と３を選んだ学習者を合わせて韓国語母語話者は20％、中国語母語話者は55％と中国語母語話者が２倍以上の数値となった。また、Q1とQ3の両方で「のコト」が使えると回答している学習者の数値を出すと、中国語母語話者が23％、韓国語母語話者が10％となった。こちらも中国語母語話者が２倍以上である。これは、「花子のことが好き」のように「好き」という形容詞があることによって、「好き」の場合は特定不特定に関わらず「のコト」が使えると考えている中国語母語話者が多いからではないかと考える。よって、中国語母語話者は韓国語母語話者よりNが不特定であっても「のコト」を使用するという誤用が多く、こちらも日本語レベルを問わず上級や特級の中国語母語話者にも誤用が見られることが分かった。

### 4. 2. 2.　コピュラ文における3タイプ

さらに、金（2012）では「～のこと」は特定の要素ではない名詞にも後続するし、「～のこと」が付いていても名詞句全体の意味に変化をもたらさない場合があると述べられている。そして、「～のこと」はコピュラ文にも現れるとし、「～のこと」が登場するコピュラ文を機能的観点から3タイプに分類している。

〔1〕ことばの定義を与える場合
〔2〕対象を探している場合
〔3〕対象を探して確認する場合

（金（2012）P .2）

これをもとに作成したのが、問題2のQ2、Q5、Q4である。

問題２　Q2　田中：花ちゃんって誰？
山本：花ちゃんは、花子【a. だよ ／ b. のことだよ】。

問題２　Q5　先生：この中に、先週のテストで満点をとった人がいます。
学生たち：誰【a. だろう ／ b. のことだろう】。

問題２　Q4　田中：ねえ、その本とって。
　　山本：ん？どれ？ああ、これ【a. か／b. のことか】。

問題２のQ2が〔1〕ことばの定義を与える場合、Q5が〔2〕対象を探している場合、Q4が〔3〕対象を探して確認する場合である。いずれも答えは3となる。結果は次のようになった。

**表4-1　随意的な「のコト」ーコピュラ文における3タイプー 日本語レベル別解答分布表（問題２）**

| 日本語レベル | | 全体平均 | 2. 初級後半 | 3. 初級と中級の間 | 4. 中級前半 | 5. 中級後半 | 6. 上級前半 | 7. 上級後半 | 8. 特級 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 名 | 10 名 | 24 名 | 10 名 | 11 名 | 11 名 | 10 名 | 10 名 |
| Q2. | 1 | 52% | 50% | 54% | 50% | 36% | 64% | 70% | 40% |
| | 2 | 15% | 10% | 21% | 20% | 9% | 0% | 0% | 40% |
| | 3 | 23% | 0% | 8% | 30% | 55% | 36% | 30% | 20% |
| | 4 | 9% | 40% | 17% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q5. | 1 | 53% | 30% | 38% | 70% | 55% | 55% | 60% | 90% |
| | 2 | 16% | 20% | 33% | 0% | 0% | 9% | 20% | 10% |
| | 3 | 20% | 10% | 13% | 20% | 45% | 36% | 20% | 0% |
| | 4 | 10% | 40% | 17% | 10% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q4. | 1 | 56% | 40% | 50% | 50% | 64% | 45% | 60% | 90% |
| | 2 | 6% | 0% | 8% | 0% | 9% | 18% | 0% | 0% |
| | 3 | 33% | 30% | 33% | 50% | 27% | 36% | 40% | 10% |
| | 4 | 6% | 30% | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| 平均正答率 | | 25% | 13% | 18% | 33% | 42% | 36% | 30% | 10% |

　　は正答率

表4-1をもとにレベル別に見ると、コピュラ文の場合もレベルが高いほど正答率が高くなるわけではないことが分かる。これら３問はどれもほとんどのレベルで1の数値が高く、全体平均ではどれも50％以上の学習者が1を選択している。よって、コピュラ文に現れる「のコト」は、a. b. どちらも使用でき「のコト」がなくても成り立つことにより、日本語レベルに問わず全体の半数以上の日本語学習者が「のコト」は必要ないと考えていることが分かる。さらに、意外な結果となったのが特級の数値である。特に特級では、これら３つのコピュラ文にはこれまでの日本語学習や日常会話の中で既に何度も触れていることと考えられるが、〔2〕対象を探している場合のQ5と〔3〕対象を探して確認する場合のQ4で１と回答した特級の学習者は90％もいる。これについては、表4-2をもとに下記で詳しく触れることとする。

**表4-2　随意的な「のコト」ーコピュラ文における３タイプー　母語別解答分布表　（問題２）**

| 母語 | | 全体平均 | 韓国語 | 中国語 | 英語 | ネパール語 | フランス語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 人 | 20 名 | 35 名 | 10 名 | 11 名 | 9 名 |
| 各母語の日本語平均レベル | | 4.7 | 5.3 | 5.8 | 2.9 | 3 | 2.9 |
| Q2. | 1 | 52% | 40% | 60% | 40% | 55% | 56% |
| | 2 | 15% | 10% | 14% | 30% | 18% | 11% |
| | 3 | 23% | 45% | 26% | 10% | 0% | 11% |
| | 4 | 9% | 5% | 0% | 20% | 27% | 22% |
| Q5. | 1 | 53% | 45% | 71% | 30% | 27% | 56% |
| | 2 | 16% | 5% | 14% | 10% | 55% | 11% |
| | 3 | 20% | 45% | 11% | 10% | 9% | 22% |
| | 4 | 10% | 5% | 3% | 50% | 9% | 11% |
| Q4. | 1 | 56% | 40% | 71% | 30% | 73% | 33% |
| | 2 | 6% | 10% | 3% | 10% | 9% | 0% |
| | 3 | 33% | 50% | 26% | 30% | 18% | 44% |
| | 4 | 6% | 0% | 0% | 30% | 0% | 22% |
| 平均正答率 | | 25% | 47% | 21% | 17% | 9% | 26% |

　　は正答率

次に、表4-2をもとに母語別に分析を行う。ここで特徴的だったのが韓国語母語話者と中国語母語者の正答率の差である。コピュラ文である計３問では、すべて中国語母語話者より韓国語母語話者の正答率が高いという結果になった。そこで、それぞれの母語を確認してみると、上記の３問はいずれも韓国語でも中国語でも「のコト」は使わず、例えばQ2の「花ちゃんは、花子のことだよ」はどちらの母語も「花ちゃんは花子だよ」となる。それにも関わらず、なぜ韓国語母語話者と中国語母語話者にこのような違いが生まれるのだろうか。表4-2を見ると、中国語母語話者で１を選んだ学習者がQ2は60%、Q5とQ4は71%おり、これらの数値はどれも全体平均を大きく上回る。さらに、Q2、Q4、Q5の3問全て1を選んだ学習者は中国語母語話者35名中12名、韓国語母語話者は20名中0名であった。よって、韓国語母語話者より中国語母語話者の方がコピュラ文の「のコト」は必要ないと考えている学習者が多いからであることが分かる。また、コピュラ文の３タイプの中でも〔2〕対象を探している場合、〔3〕対象を探して確認する場合の２つのタイプは中国語母語話者が特に「のコト」が使えないと考えやすいタイプであることが分かった。

また、表4-1の日本語レベル別による分析の際に、特級の正答率の低さについて触れていたが、特級は10名中９名が中国語母語話者で残り１名は韓国語母語話者である。また、この特級の韓国語母語話者は表4-2の３問中２問正答しているため、特級の正答率が低い理由は中国語母語話者の数が多いためであると考えられる。なお、中国語母語話者でコピュラ文の「のコト」が必要ないと考えている学習者が多いという結果は、特級レベルにも現れており、この結果は日本語のレベルを問わず現れることが分かった。今回、特級は学習者の母語に偏りがあったため、今回の特級の結果については韓国語母

語話者のデータをさらに集め、今後さらに分析する必要がある。

### 4. 2. 3.　コト：属性

また、笹栗（1998：168）では統語分布に制限を受けない場合と受ける場合の「のコト」の両者の中間にあると思われる、思考動詞「思い出した」と「Ｎのコト」の関係について述べられている。

⑺　太郎が花子のコトを思い出した

この文は、「のコト」がない場合も解釈が可能な文である。「思い出す」という動詞は、個体の存在自体を思い出すという意味にもとれる。また「Ｎの属性」や「Ｎが参加者であるイベント」を思い出すという意味にもとれる。従って、このような動詞が補部に「Ｎのコト」をとるとその解釈は多義的になる。

（笹栗（1998）Ｐ.168）

そこで、次のような問題を作成した。

問題３　Q3　サークルのメンバーが集まって次のリーダーを誰にするか話している。メンバーは元々花子を知っている。花子はそこにはいない。[12]

山本　：次のリーダーは誰がいいかな？
田中　：3年生で、毎週会議に来られる人がいいよね。
山田　：あ、あの子はどう？3年生にいい人がいるじゃん。
みんな：あ、花子さん！

→　みんなが花子【a. を ／ b. のことを】思い出した。

笹栗（1998：170）ではQ3のような状況の場合「xがリーダーに適任」のxに入る「誰か」、つまりxに入る値を思い出そうとしており、この場合「のコト」の有無は解釈に影響しないように見えると述べられている。

⑻　a. 花子を思い出した
　　b. 花子のコトを思い出した

（笹栗（1998）Ｐ.170）

次に、花子を忘れており、花子に関する属性をヒントに思い出した場合である。下記のような問題を作成した。

問題３　Q4　山本は花子と同じクラスだが、花子の顔が出てこない。

山本　:花子って誰？
田中　:ほら、花子だよ。髪が長くて、いつも一番後ろに座っている花子だよ。
山本　:ああ、やっと花子【a. を ／ b. のことを】思い出したよ。

このような場面の場合について笹栗（1998）は次のように述べている。

思い出したことを友だちに報告する場合には、裸の固有名詞の「花子」ではなく「のコト」つきの「花子のコト」が適当である。

⑼　a.?*やっと花子を思い出したよ
　　b.　やっと花子のコトを思い出したよ

⑽　a. コト：属性
　　b. 花子のコト：存在する特定の個体＋属性

（笹栗（1998）pp.170-171）

笹栗（1998：171）では、元々知っていたはずの個体を忘れてしまい、属性をてがかりに思い出す作業をし、その結果名前と知識内に残っている属性が結びついた（9b）の場合、その属性を手がかりにした思考過程が「のコト」に反映されているとしている。また、問題3のQ3も同様に属性からたどって適任者を思い出すため、「のコト」を使うことができる。

さらに、「コト」が属性を意味していることを日本語学習者が理解しているのか、状況によって「のコト」の使用を使い分けられるかどうか探るため、問題3のQ1、Q2の状況を追加した。

問題３　Q1　田中　：太郎の電話番号知ってる？
　　山本　：あ、ちょうど昨日太郎に聞いたのに、忘れてしまったよ。
　　メモをとっておけばよかった。

→　山本さんは太郎の電話番号【a. を ／ b. のことを】忘れた。

問題３　Q2　山本　：英語のレポート、明日までだよね？
　　田中　：え？レポートの宿題があるの？
　　山本　：うん。先週先生が言ってたよ。

→　田中さんはレポート【a. を ／ b. のことを】知らなかった。

問題３のQ1は、太郎の電話番号が何番なのか、電話番号自体を忘れているため、「のコト」は使用できない。「のコト」を使用すると、「太郎に電話番号を聞いたことを忘れた」「太郎に電話番号を聞か

なければならなかったことを忘れた」などの意味になるためである。そして、Q2は「田中さんはレポートがあることを知らなかった」という状況である。この場合は「レポートがあること＝レポートのこと」とし、bが正解である。また、「知っている」も「思い出す」と同じく、中間的な述語である。結果は次のようになった。

**表5-1　随意的な「のコト」－コト：属性－　日本語レベル別解答分布表　（問題３）**

| 日本語レベル | | 全体平均 | 2. 初級後半 | 3. 初級と中級の間 | 4. 中級前半 | 5. 中級後半 | 6. 上級前半 | 7. 上級後半 | 8. 特級 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 名 | 10 名 | 24 名 | 10 名 | 11 名 | 11 名 | 10 名 | 10 名 |
| Q1. | 1 | 69% | 40% | 79% | 50% | 73% | 55% | 90% | 80% |
| | 2 | 7% | 10% | 8% | 10% | 0% | 18% | 0% | 0% |
| | 3 | 19% | 20% | 4% | 40% | 27% | 27% | 10% | 20% |
| | 4 | 6% | 30% | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q2. | 1 | 13% | 20% | 21% | 20% | 18% | 0% | 0% | 0% |
| | 2 | 63% | 20% | 71% | 30% | 55% | 82% | 70% | 100% |
| | 3 | 20% | 30% | 8% | 40% | 27% | 18% | 30% | 0% |
| | 4 | 5% | 30% | 0% | 10% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q3. | 1 | 19% | 20% | 17% | 10% | 27% | 18% | 20% | 20% |
| | 2 | 37% | 20% | 46% | 40% | 18% | 27% | 40% | 60% |
| | 3 | 38% | 30% | 29% | 50% | 55% | 55% | 40% | 20% |
| | 4 | 6% | 30% | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| Q4. | 1 | 20% | 10% | 25% | 10% | 0% | 27% | 40% | 20% |
| | 2 | 43% | 30% | 38% | 30% | 36% | 55% | 50% | 70% |
| | 3 | 22% | 0% | 17% | 50% | 64% | 9% | 10% | 10% |
| | 4 | 15% | 60% | 21% | 10% | 0% | 9% | 0% | 0% |
| 平均正答率 | | 53% | 30% | 54% | 40% | 55% | 62% | 63% | 68% |

　　は正答率

まず、表5-1をもとに「コト」が属性を意味していることを理解していれば簡単だと考えられるQ1とQ2を日本語レベル別に分析する。どちらも全体平均の正答率は60％以上で、これは随意的な「のコト」の問題の中では正答率が高い結果となった。[13]また、Q2で「のコト」を使うと考えている２と３を選んだ学習者の数値を合わせると、上級前半、上級後半、特級の上位３つのレベル全てが100％となる。これにより、上級以上の学習者はQ2のような単純な会話では属性を意味している「コト」は見落とすことなく使用できることが分かる。

しかし、Q3とQ4は特級を見ても2と3の数値を合わせると80％とやや下がり、全体平均の正答率もQ1、Q2と比べ大きく下がることが分かる。Q3を見ると、特級の正答率20％に比べ、中級前半から上級前半まではいずれも50％を超えている。なぜこの中間レベルの正答率が上がっているのか。ここで、３と回答した学習者に注目して見るとQ3とQ4でどちらも３と回答した学習者は、中級前半に４名（40

%[14])、中級後半にも４名（36%）、残りは全て10%未満の数値[15]となった。また、Q1、Q2を見ても特に中級前半の３の数値が高いことが分かる。これにより、Q3では中級前半から上級前半が属性を意味する「コト」を理解しているのではなく、「Nのコト」を学習し習得途中である中級では「コト」が使えるかどうかの区別が難しく、中級は「コト」の有無はどちらでもいいと考える学習者が多い時期であると考えられる。特に「電話番号自体を忘れた」という場面であるQ1で中級前半の40%もの学習者が３を選んだことは「コト」の有無はどちらでもいいという考えの表れである。

**表5-2　随意的な「のコト」ーコト：属性ー　母語別解答分布表　（問題３）**

| 母語 | | 全体平均 | 韓国語 | 中国語 | 英語 | ネパール語 | フランス語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | | 86 人 | 20 名 | 35 名 | 10 名 | 11 名 | 9 名 |
| 各母語の日本語平均レベル | | 4.7 | 5.3 | 5.8 | 2.9 | 3 | 2.9 |
| Q1. | 1 | 69% | 55% | 74% | 40% | 91% | 78% |
| | 2 | 7% | 5% | 9% | 10% | 0% | 11% |
| | 3 | 19% | 35% | 17% | 20% | 0% | 11% |
| | 4 | 6% | 5% | 0% | 30% | 9% | 0% |
| Q2. | 1 | 13% | 15% | 3% | 50% | 9% | 11% |
| | 2 | 63% | 45% | 83% | 20% | 82% | 44% |
| | 3 | 20% | 35% | 11% | 20% | 9% | 33% |
| | 4 | 5% | 5% | 3% | 10% | 0% | 11% |
| Q3. | 1 | 19% | 20% | 26% | 0% | 18% | 11% |
| | 2 | 37% | 20% | 40% | 20% | 55% | 56% |
| | 3 | 38% | 55% | 34% | 40% | 27% | 33% |
| | 4 | 6% | 5% | 0% | 40% | 0% | 0% |
| Q4. | 1 | 20% | 5% | 26% | 0% | 27% | 44% |
| | 2 | 43% | 40% | 54% | 20% | 55% | 11% |
| | 3 | 22% | 40% | 17% | 20% | 9% | 22% |
| | 4 | 15% | 15% | 3% | 60% | 9% | 22% |
| 平均正答率 | | 53% | 49% | 61% | 30% | 64% | 42% |

　　は正答率

次に表5-2をもとに韓国語母語話者と中国語母語話者を比較すると、問題３の計４問の中でQ3を除いた３問は中国語母語話者より韓国語母語話者の正答率が全て下回っており、全体平均の正答率より低い数値となっている。特にQ1とQ2に関しては大きく差が開いていることが分かる。Q2の場合「レポートのことを知らなかった」を中国語では日本語と同様「のコト」を使用するが、韓国語では「レポートがあることを知らなかった」となることから、Q2に関しては母語の転移も見られる[16]が、それ以外のQ1、Q4でも差が見られる。そこで韓国語母語話者を見ると、Q1、Q2、Q4で正答率が低い一方、３の数値が他の母語よりも高いことが分かる。そのため、３が正答であるQ3の正答率は中国語母

語話者より唯一高い。これにより韓国語母語話者にとって属性として使用する「のコト」の使い分けは中国語母語話者より難しく、「のコト」があることによって意味が変わることまで理解できていない学習者が多いことが分かる。また、問題３の４問全て３と回答した学習者は全体の86名中３名おり、韓国語母語話者が２名（中級前半１名、中級後半１名）、中国語母語話者が１名（中級前半）となった。表5-1の日本語レベル別の分析で中級は「コト」の有無はどちらでもいいと考える学習者が多い時期だと考えられると述べたが、この３名も皆中級レベルであることが分かる。

## ５．まとめと今後の課題

本研究ではアンケート結果をもとに、「Ｎのコト」を日本語学習者がどの程度理解しているのか、またどのような誤用が多いのかを考察した。４章の結果を次のようにまとめた。表6-1、表6-2は各レベルと韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれの理解度を示している。正答率が0％から30％を「低」、40％から79％を「中」、80％から100％を「高」とし、理解度をまとめた。

**表6-1　必須の「のコト」の理解度**

| | | 必須の「のコト」 | |
|---|---|---|---|
| | | 「のコト」が必要な動詞の場合 | 「のコト」が使えない動詞の場合 |
| レベル | 1　初級前半 | ― | ― |
| | 2　初級後半 | 中（40％） | 低（10％） |
| | 3　初級と中級の間 | 中（60％） | 中（63％） |
| | 4　中級前半 | 中（73％） | 中（70％） |
| | 5　中級後半 | 高（80％） | 高（95％） |
| | 6　上級前半 | 高（78％） | 高（95％） |
| | 7　上級後半 | 高（95％） | 高（95％） |
| | 8　特級 | 高（90％） | 高（95％） |
| 母語 | 韓国語 | 中（75％） | 高（90％） |
| | 中国語 | 高（83％） | 高（82％） |

**表6-2　随意的な「のコト」の理解度**

| | | 随意的な「のコト」 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 特定 | 2. コピュラ文におけるタイプ | | | 3. 属性 |
| | | | 〔1〕 | 〔2〕 | 〔3〕 | |
| レベル | 1　初級前半 | — | — | — | — | — |
| | 2　初級後半 | 中（45%） | 低（ 0%） | 低（10%） | 低（30%） | 低（30%） |
| | 3　初級と中級の間 | 中（52%） | 低（ 8%） | 低（13%） | 低（33%） | 中（54%） |
| | 4　中級前半 | 中（65%） | 低（30%） | 低（20%） | 中（50%） | 中（40%） |
| | 5　中級後半 | 低（36%） | 中（55%） | 中（45%） | 低（27%） | 中（55%） |
| | 6　上級前半 | 中（55%） | 低（36%） | 低（36%） | 低（36%） | 中（62%） |
| | 7　上級後半 | 中（60%） | 低（30%） | 低（20%） | 中（40%） | 中（63%） |
| | 8　特級 | 中（65%） | 低（20%） | 低（ 0%） | 低（10%） | 中（68%） |
| 母語 | 韓国語 | 中（65%） | 中（45%） | 中（45%） | 中（50%） | 中（49%） |
| | 中国語 | 中（49%） | 低（10%） | 低（10%） | 低（30%） | 中（61%） |

まず、必須の「のコト」と随意的な「のコト」の違いとして、必須の「のコト」はレベルが上がるにつれて理解度が高くなるが、随意的な「のコト」はレベルが上がるにつれて理解度が高くなるわけではない。また、随意的な「のコト」の中でもコピュラ文に現れる「のコト」への理解度が最も低いことが分かった。コピュラ文の「のコト」はなくても文が成立することにより「のコト」を使用しないと考えている学習者が多いことが理由であり、上級や特級の理解度も低く、母語別に見ると韓国語母語話者より中国語母語話者の理解度が低い。

韓国語母語話者を中心に見ると、表6-1の「のコト」が使えない動詞の場合に関する理解度が高く、初級と中級の間以上は正答率100%であった。また、坪根（2002）では初中級の発話中「のコト」が出現しなかったが、中級にも必須の「のコト」を理解している学習者がいることが分かり、理解はできるが発話として実用することまではできないことが分かった。一方、必須のものの「のコト」が必要な動詞の場合と、随意的な「のコト」は理解度が「中」である。また、随意的なものの中でも「コト：属性」に関しては、属性として使用する「のコト」の使い分けは中国語母語話者より難しく、多義的な解釈ができる「のコト」の場合、「のコト」があることによって意味が変わることまで理解できていない学習者が多いことが分かった。表6-2の属性に関する母語別の理解度はどちらも「中」であるが、数値がその差を表している。また、坪根（2002）では、超級の5名中全員が発話で正しく使用していたが、結果として特級の韓国語母語話者にも誤用が見られることが分かった。特級で唯一の韓国語母語話者は計15問中３問誤答しており、そのうち2つは母語の転移、またコピュラ文の〔2〕対象を探しているというタイプの問題で「のコト」が使用できないと考え誤答している。一方「N：属性」に関する問題3は全て正解している。しかし、これは特級の韓国語母語話者1名のみのデータであるため、今後より多くのデータからの分析が必要である。

中国語母語話者の場合は、必須の「のコト」はどちらも理解度が高いものの、韓国語母語話者のように上のレベルが正答率100%にはならず、誤答した学習者は日本語レベルにばらつきがあり、理解できていない学習者は上級や特級にも一部いることが分かった。また、随意的な「のコト」に関しては上記で述べたコピュラ文に現れる「のコト」に加え、「Nが特定であること」への理解度が「中」の中

でも数値が低い。この理由として、「好き」の場合は特定不特定に関わらず「のコト」が使えると考えている中国語母語話者が多いからでないかと考えられる。

今回のアンケート調査では各日本語レベルと各母語で学習者の人数に偏りがあったことで、各母語の中でのレベル別による比較などが難しい点があった。特に特級の韓国語母語話者は１名のみのデータから分析を行ったため、今後一つの母語の中でも各日本語レベルの人数を統一した上で分析する必要がある。また、今回誤用が見られたものの原因として母語の転移など、いつくかの原因を述べたが、原因はその他にもあると考えられ誤用の原因についてさらなる詳しい分析が必要である。加えて、理解度が高かった点において、なぜ理解度が高いのか、どういった点が学習者にとって理解がしやすいのか詳しい分析がまだできていない。さらに、これらの分析を活かし学習者にどのように教えることで、誤用を取り除くことができるのか、また理解はできているが発話としての実用まで及ばない学習者が実用できるようになるにはどうするべきか、なども考えていく必要がありこれらを今後の課題としたい。

## 【注】

[1] 日本語学習者に向けた教材である佐々木仁子・松本紀子（2011）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN3文法』 株式会社アスク出版に学習項目の一つとして登場している。

[2] 今回の調査では、英語、ネパール語、フランス語、ベトナム語の母語話者は、学習者の人数が少なかったことに加え、「のコト」を使った文がその言語ではどういった表現になるのか調べることができなかったため、人数も多く日本語平均レベルも近い韓国語母語話者と中国語母語話者を中心に比較することにした。

[3] これは、発話中1つでも正しく使うことができた人の数を指している。

[4] 坪根（2002）（2003）では、「習得」という用語を用いてきたが、一連の研究の被験者数が少ないことから「習得」という用語を用いるのは適当でないと判断し、坪根（2005）では「正用順序」という用語が用いられている。そのため、坪根（2002）のように「Nのこと」に関する習得については記されていない。

[5] 坪根（2002）で「Nのこと」は「こと」化するものしか出現していなかったが、坪根（2005）では「Nのこと（時）」を使用する学習者が現れ、「Nのこと」は「Nのこと（こと化）」と「Nのこと（時）」の2つに分類されている。下記のように例文が示されている。

１）名詞（N）のこと（こと化）：私のこと知っていると思い、と思うよ

２）名詞（N）のこと（時）：これは、１カ月前のことで、

（坪根（2005）　p .7）

[6] 授業内容から、初級と中級の間以上は「Nのコト」が既習であると考えられる。

[7] ベトナム語母語話者は1名のみであるため、ベトナム語は母語別の比較からは除外し、5つの母語の数値を出している。なお、全体平均にはベトナム語母語話者1名のデータも含まれている。

[8] 「各母語の日本語平均レベル」は表1にある日本語レベルの1から8の数値を用い、母語別に学習者の人数でその平均値を出した数値である。

[9] 「分かる」は日本語では「が格」だが、韓国語の場合は「を格」であるため、直訳すると「日本をよく分かる本」となる。

[10] 問題１のQ1「自分の国のことを発表する」は、中国語では日本語と同様「自分の国のことを発表する」となるが、韓国語では「自分の国を発表する」となる。

[11] 表2-2の英語、ネパール語、フランス語母語話者を見ると、これらの日本語平均レベルはほぼ同じであるが、ネパール語母語話者の正答率が比較的高い。この正答率の差は、日本語学習歴や日本で生活している期間がネパール語母語話者の方が長いことが理由の一つであると考えられる。また、ネパール語母語話者のQ4が正答率91％に対し、Q5は36％と全体正答率を大きく下回っている。Q5で×と回答したネパール語母語話者がなぜ64％もいるのか、その点についての理由はまだ解明できておらず、今後の課題の一つとしたい。

[12] 問題３のQ3は笹栗（1998）の4.2.1にある「議長の適任者を探す時」の例として挙げられていた場面を、適任者となる対象を「議長」から「サークルのリーダー」へ変えるなど、日本語学習者に向けてより分かりやすい場面にするため筆者が調整を加えた。

[13] 表5-1のQ1、Q2見ると、初級と中級の間の正答率が前後のレベルに比べ高いが、これはネパール語母語話者の正答率が高いことが一つの理由であると考えられる。初級と中級の間にはネパール語母語話者が11名おり、そのうち８名がQ1、Q2のどちらも正答している。この正答率の高さは他の母語話者には見られないもので、今回はネパール語母語話者が一つのレベルに偏っているためこのような結果となった。

[14] 括弧内は各レベル内でのパーセンテージを表している。

[15] 初級と中級の間で１名（４％）、上級後半に１名（10%）、その他のレベルは０名（０％）となった。

[16] 問題３のQ1「電話番号を忘れた」は韓国語も中国語も同じく「電話番号を忘れた」となり、Q3の「花子のことを思い出した」はどちらも「花子を思い出した」となる。また、Q4の「花子のことを思い出したよ」は韓国語では「花子を思い出したよ」、中国語では「花子が誰なのかを思い出したよ」となり、Q1、Q3、Q4の場合はどちらの母語も「のコト」を使用しない。

## 参考文献


金英周（2009）「述語によって要求されるノコト名詞句の意味範囲－述語の要求する補文との比較を通して－」広島大学教育学研究科紀要2：58,175-184.

金英周（2012）「「名詞句のこと」の談話機能－コピュラ文に現れる場合を中心に－」広島大学日本語教育研究-(22),1-8.

工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文解釈と鑑賞』③

佐々木仁子・松本紀子（2011年）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3文法』 株式会社アスク出版

笹栗淳子（1996）「現代日本語における「Nのコト」の分析－2つの用法と「コト」の統語的位置－」『九州大学言語学研究室報告』第17号

笹栗淳子（1998）「名詞句のモダリティとしてのコト－「Nのコト」と述語の相関から－」『言語学と日本語教育－実用的な言語教育の構築を目指して－』pp.161-176.　くろしお出版

笹栗純子・金城由美子・田窪行則（1999）「心的行為における認識主体と対象との関係」日本認知科学会第16回大会

田窪行則（1989）「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版

坪根由香里（2002）「OPIにおける韓国語話者の「もの」「こと」の使用と習得」『ICU 日本語教育研究センター紀要』第11号、pp.23-35.

坪根由香里（2004）「OPIにおける英語話者の「もの」「こと」の使用と習得」『ICU 日本語教育研究センター紀要』第12号、pp.15-28.

坪根由香里（2005）「OPIにおける中国語話者の「もの」「こと」の使用とその正用順序」『ICU日本語教育研究』第1号、pp.4-20.

山口登（1973）「日本語の「～ノ・コト」についての序説-変形生成文法理論の観点から-『福島大学教育学部論集』25（2）、43-54.

**【付録】**（実際は、漢字のルビ、学生の情報に関する欄には英語訳があるが今回は省略している。）

# 「Nのこと」に関するアンケート

| | |
|---|---|
| 国 ：（　　） | 民族：　（　　）※中国の学生のみ |
| 性別：（　男 ・ 女　） | 年齢：　（　　） |
| 所属：（　　） | 日本語のクラス：　（ Level _____ ） |
| 日本語学習歴：<br>（ 半年以内 ・ 半年～１年 ・ １年～２年 ・ ２年～３年 ・ ３年～４年 ・ ５年以上 ） | |
| 日本語能力試験のレベル：（ N_____ ） ※日本語能力試験を受けたことがある人のみ | |

**問題１　文を読み、のこと が正しい場合は（○）、正しくない場合は（×）、分からない場合は（？）を書いてください。**

Q1. 日本語の授業で自分の国のことを発表する。（　　）
Q2. 授業の後、先生にテストのことを聞こうと思っている。（　　）
Q3. 旅行でたくさん写真のことを撮った。（　　）
Q4. 最近、よく将来のことを考える。（　　）
Q5. これは日本のことがよく分かる本だ。（　　）
Q6. 田中さんは健康のために、毎日家の近くのことを走っているらしい。（　　）

**問題2　会話文を読み、それに合うものを（1）～（4）から選んでください。**

Q1. 山田：花子さんは、どんな人が好きなの？
　花子：背が高くて、優しい人【 a.　が　／　b. のことが　】好き。

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1)　a. | (2)　b. | (3)　a.b. どちらも○ | (4)　わからない |

（以下、選択肢省略）

Q2. 田中：花ちゃんって誰？
　山本：花ちゃんは、花子【a. だよ ／ b. のことだよ】。

Q3. 田中：さっきから、ずっとその写真を見ているね。
　その写真の中の誰か【a.　が　／　b. のことが　】好きなの？

Q4. 田中：ねえ、その本とって。
　山本：ん？どれ？ああ、これ【a. か ／ b. のことか】。

Q5. 先生：この中に、先週のテストで満点をとった人がいます。
学生たち：誰【a. だろう ／ b. のことだろう】。

**問題３　状況や会話を読み、それに合うものを(1)〜(4)から選んでください。**

Q1. 田中：太郎の電話番号知ってる？
山本：あ、ちょうど昨日太郎に聞いたのに、忘れてしまったよ。
メモをとっておけばよかった。
→　山本さんは太郎の電話番号【a. を ／ b. のことを】忘れた。

Q2. 山本：英語のレポート、明日までだよね？
田中：え？レポートの宿題があるの？
山本：うん。先週先生が言ってたよ。
→　田中さんはレポート【a. を ／ b. のことを】知らなかった。

Q3. サークルのメンバーが集まって次のリーダーを誰にするか話している。メンバーは元々花子を知っている。花子はそこにはいない。

山本：次のリーダーは誰がいいかな？
田中：3年生で、毎週会議に来られる人がいいよね。
山田：あ、あの子はどう？3年生にいい人がいるじゃん。
みんな：あ、花子さん!
→　みんなが花子【a. を ／ b. のことを】思い出した。

Q4. 山本は花子と同じクラスだが、花子の顔が出てこない。

山本:花子って誰？
田中:ほら、花子だよ。髪が長くて、いつも一番後ろに座っている花子だよ。
山本:ああ、やっと花子【a. を ／ b. のことを】思い出したよ。